

## 冠詞の意味：個物の表現

水 野 光 晴

### (1) 冠詞の特質

事物はいろいろな意味で存在している。すなわち、我々が存在として捉えるものは、時間、空間の中で様々に規定され、その性質によって相互に関係し合い、あるいは区別される。つまり、事物は我々の感覚や知覚に対してさまざまな形態をとって現われるが、その多様性は常に結合されたゲシュタルト（統一的表象）を構成している。そこで、このように知覚される多様な性質を担い、多様に変化する事物の根底にあって、恒常にして統一的な存在を、実体 (Substance) と呼ぶ。換言すれば、さまざまに変化してゆく事物の根底にある持続的なもの、そのような変化の中で、つぎつぎに現われる様々な性質の担い手として考えられるものが実体に他ならない。それに対して多様な性質は、それが本質的であるか、非本質的であるかによって区別される。すなわち、事物の恒常的で本質的な性質、事物がそれなしには考えられないような性質を属性 (attribute) と呼び、いろいろに変化する事物の非本質的な性質は、偶有性 (accident) と呼ばれる。つまり、この偶有性は、実体のまわりで生成、消滅、変化する性質であるが、とりわけ実体の変化する形態という観点から捉えられた場合は、様態 (mode) と呼ばれる。したがって、様態は属性の変化した状態である。

ところで、属性は一つの事物に一つとは限らない。現実の事物はさまざまな側面からなっており、どの側面を取り上げるかによってその属性が決まる。たとえば、ある女性を人間として捉えた場合は、その属性は人間一般に共通な個体としてのゲシュタルトであり、その女性を動物として捉える場合は、動物一般に共通な個体としてのゲシュタルトであり、その女性を物体として捉える場合は、物体一般に共通な個体としての極

めて抽象的なゲシュタルトである。このように属性は、同じ実体であっても、それをどの種類のメンバーとして捉えるかによって異なってくる。また、属性は常に明瞭であるとは限らない。たとえば、棒と板は、異なったメンバーの属性であるが、幅と厚さが近似したものを棒と呼ぶべきか、板と呼ぶべきか、判断し難い。このように、表現者が対象をどう捉えるかによって、その属性の表現のあり方も変わってくる。

属性は、実体のあり方に基づいているが、直接には、人間がその属性をどう捉えるかにかかっている。したがって、表現の対象となる現実の実体のあり方は、普遍であるが、その捉え方は、個人によって異なることもあれば、民族によって異なることもある。すなわち、それぞれの民族の中では、歴史的に共通な属性観が共有され、各言語の規範として成立しているのである。英語やフランス語の属性観は、他の民族の言語の属性観と同様に、彼らの日常的、経験的認識をカテゴリー化したものである。したがって、そのような属性観は、その言語の中に育った母語話者には極めて自然であっても、別の日常的、経験的な捉え方に慣れた民族にとっては、不自然であり、不可解にも思われるのである。

かくして、この世界に存在する森羅万象の様態を、その表現者が如何に認識しているかを表示する語が、冠詞に他ならない。つまり、冠詞はその表現者が、表現の対象となる実体をどのようなものとして捉えているかを如実に示す語である。印欧語では、まず表現の対象となるものが、その理解者にとって既知の (known) 情報であるか、それとも未知の (unknown) 情報であるかによって、あるいは特殊なもの (Specific) であるか、それとも一般的なもの (General) であるかによって分類するのである。その結果、既知の情報、あるいは特殊なものとして分類された実体を表現する場合、その名詞の前に既知情報、あるいは特殊性の指標として、定冠詞を添えるのである。つまり、定冠詞は表現者と理解者が相互に共有する知識であることを表示する機能をもっている。

他方、未知の情報、あるいは一般的なものとして認識された実態を表現する場合は、さらにまた別の分類基準が適用されることになる。すなわち、その実体が数えられるもの (countable) であるか、それとも数えられないもの (uncountable) であるかによって対象がさらに二分される。前者は可算名詞といわれるもので、特殊なもの、具体的で定形をも

つ個物語である。この可算名詞には、boys や cars などの、物質的実体のみならず、words, ideas, events, laughs などの非物質的実体が含まれる。これらの名詞の前には、不定冠詞が未知情報の指標として添えられる。他方、後者の不可算名詞は、一般的、抽象的な無定形の質量語である。この不可算名詞にも、water, butter, tea, air などの物質的実体のみならず、leisure, music, success, safety などの非物質的実体が含まれる。そして、これらの質量語に添えられる未知情報の指標は、ゼロ冠詞である。以上の関係をまとめれば、次のようになる。

認識対象	可算名詞 (個物語)	物質的実体 — boys, cars
		非物質的実体 — words, ideas, events, laughs
	不可算名詞 (質量語)	物質的実体 — water, tea, butter, air, oil
		非物質的実体 — leisure, music, success, safety

すなわち、その名詞が冠詞を取るか取らないかの区別の基準は、その名詞に文法上の数の観念を適用できるか否かにかかっている。つまり、可算名詞と不可算名詞の区別が、不定冠詞を取るか取らないかの基準になっており、この基準の背後には、その表現の対象をどのように認識し、どう表現するのかに関して、その言語特有の属性観がはたらいている。

属性とは、ある種類に特有なゲシュタルト（まとまり）である。印欧語では、とりわけそれは個別性と連続性によって二大区分される。個別性 (Individuality) とは、ある種類の実体に特有な個物としてのゲシュタルトである。実体が持つさまざまな属性のうちで、最も抽象的で最も一般的な属性は個別性である。しかし、ある種の物体は、その形態があまりにも多様なため、個別性を認めないこともありうる。また、個別性は特殊性の一面であるから、特殊性を捨象して実体を極めて抽象的に捉えた場合も、個別性は捨象されることになる。個別性をもつ語には、連続性がない。逆に、連続性 (Continuity) とは、ある種類の実体に普遍的なものである。連続性をもつ語は質量語であるが、これらの語は個別性をもたない。このように、冠詞は実体の個別性、連続性と不可分の関係にある。

## (2) 固有名詞と冠詞

固有名詞に冠詞がつかないのは、固有名詞がすでに個別性の認識を前提としており、それ自体極めて特有な実体の名称だからである。したがって、一般には、個別性の標識である冠詞を固有名詞にあえて添える必要などないのである。但し、ある種の固有名詞に定冠詞が添えられる例が少なくない。次の例は、その語彙の成立の事情からして、定冠詞を冠するようになったものと思われる。

- (1) 河川・運河：the River Thames, the Panama Canal
- (2) 海洋・海峡：the Pacific Ocean, the English Channel
- (3) 艦船・列車・飛行機：the Queen Elizabeth II, the Western Pacific Railroad, the British Airway
- (4) 出版物：the Times, the Sketch Book, the Oxford Dictionary
- (5) 公共建造物：the British Meuseum, the Red Cross Hospital, the White House, the Tower, the London Zoo
- (6) 国民の総称：the English, the French, the Japanese
- (7) 言語：the English for “risu”, the German of this era
- (8) 地名：the Hague, the Strand, the Jungfrau
- (9) 職名：the Queen, the President
- (10) ofを含む地名：the Strait of Dover, the Lake of Constance, the Cape of Good Hope, the Gulf of Mexico
- (11) 形容詞を含む人名：the elder Pitt, the wise Helen
- (12) 複数形固有名詞：the Browns, the Alps, the Middle States, the United States
- (13) 国民名：the Chinese, a Japanese, a Greek
- (14) Osaka is the Chicago of Japan. (大阪は日本のシカゴである。)
- (15) A Mr. Smith come to see you while you were away. (君の留守中にスミスさんという人が面会に来られた。)
- (16) She is a Spencer (彼女はスペンサー家の出である。)
- (17) We have three Johns in our class. (私たちのクラスにはジョンが三人もいる。)

上記の(1)～(7)はいずれも一般民衆が共有する知識と考えられるため、

既知情報の指標である the が冠せられ、歴史的に語法として定着したものであろう。(8)と(9)は、もともと普通名詞の語に特殊的個別性の the が冠せられていたものが習慣化し、固有名詞に転化したものである。すなわち、(8)は、原語ではそれぞれ「庭園」、「河岸」、「乙女」の意であった。(9)の名詞を大文字にするのは、尊敬の念を強調するためである。(10)は、後方照応 (cataphora) の of によって特殊化された普通名詞 the strait を、固有名詞化するために大文字で始めるようになったものと思われる。ただし、Hudson Strait のように固有名詞が先行する場合はゼロ・フォームになる。(11)は形容詞に特殊的個別性の the が付いて、普通名詞化したものが固有名の前に置かれ、語法として習慣化したものであろう。(12)のように、固有名詞が複数形になると、普通名詞に相当するものといった心理がはたらき、特殊的個別性を示す the が冠せられたと思われる。(13)~(17)はいずれも固有名詞が普通名詞に転用された結果、冠詞が添えられるに至ったものである。固有名詞はその対象を特殊的個別性—固有性の側面で捉えた表現であるが、それを対象の種類全体に共通の側面で捉えるようになると、普通名詞に転化するのである。

### (3) 物質名詞と冠詞

日本語の名詞には数の区別がないので、「本」は1冊でも、2冊でも、同じように「本」という語を用いる。これに対して、英語や仏語の名詞には数の区別があり、実体が数えられるものであるか、数えられないものであるかを常に厳密に区分する。そして、その実体が一担数えられるものと捉えられれば、単数か複数か一見して判別可能にすることが要求される。したがって、日本語のように単数複数のどちらでもない名詞は存在しないのである。英語で数えられる名詞に分類される語は、普通名詞と集合名詞であり、単数の場合は不定冠詞 a(n) か、数詞 one がその名詞に冠せられ、複数の場合にはその名詞に複数形語尾 -s が付けられるので、複数形名詞の前はゼロ・フォームになる。但し、この場合のゼロ・フォームは不可算名詞のゼロ・フォームと内容が異なる。複数形名詞は、個別性を標示しており、対象を個物体として認識しており、数をプラスの側面で捉えているからプラス・ゼロ (+ $\phi$ ) である。それに対して不可

算名詞は、対象を連続体として認識して、数をマイナスの側面で捉えているからマイナス・ゼロ（ $-\phi$ ）である。

英語の物質名詞や抽象名詞には、一般的個別性の標識である不定冠詞が付かない。すなわち、個物としての table, chicken, apple, mink, などには不定冠詞が冠せられるが、それらが家具(furniture), 食物(food), 毛皮などになると、個別性が剥奪されてしまう。ちなみに、furniture とは「家の中に置かれる大きな移動可能な物品」であり、food とは「生物が生存のために体内に取り入れるもの」である。すなわち、物質名詞とは、同種の実体から成る集合を連続体(continuum)として捉えた語である。したがって、日本語では、テーブル、ソファー、椅子、ベッドなどを3点セット・5点セットなどと称して、家具をそれぞれ別個の個物として扱う傾向があるが、英語では一定の輪郭をもたない連続性において捉えようとする傾向がある。同様に、apple や eggs や candies などの個々の食品も、食物として把握されると、個別性は消滅して連続量として捉えられるようになる。つまり、表現の対象そのものは、同一の実体であっても、それを個別性の側面から捉えた場合と、連続性の側面から捉えた場合の違いが、冠詞の有無によって如実に示されるのである。つぎの例は、その顕著な見本である。

- (18) Wood is used for making houses, boats, boxes, and furniture.

—Thorndike

- (19) a. 'as black as a Mink' being a proverbial expression in America.

—OED

- b. Chinchilla is more expensive than mink.

—Thomson & Martinet

- (20) a. This is a cake, and that is a cheese.

- b. I may not have cake and cheese.

—C.K., Ogden

- (21) a. This is wine, and that's whisky.

- b. This is an excellent wine for women.

—CDEG

- (22) a. This is made of glass.

- b. I want a glass of water.

—CDEG

- (23) a. We expect much rain this summer.

- b. We expect a long rain this summer.

—CDEG

すなわち、(18)の wood は、連続性の側で捉えられた質量語である。したがって、無形冠詞のゼロ・フォームが冠せられる。しかし、同じ実体であっても、それを1本1本の木として認識する場合は、不連続体となり、個別性の側面で捉えられるから、不定冠詞 a(n) あるいは複数形語尾 -s が付されることになる。また、houses, boats, boxes, などは同じ材料から構成された個物であるから、複数語尾 -s が付いている。ところが、furniture になると、各々の個物の集合は一般的、抽象的な無定形なゲシュタルトとして認識され、連続性の側面で捉えられるようになるため、ゼロ・フォームになるのである。(19) a. の mink は動物としてのミンクである。したがって、個物語の標識である不定冠詞 a が冠せられている。語形は同じであっても、b. の mink は毛皮のミンクであるから、同じ実体を連続性の側面で捉えた質量語である。さらに、(20) a. の cake もその実体を個別性の側面で捉えた個物語であるが、b. の cake は連続性の側面で捉えた質量語である。以下(21)~(23)も同様である。このように、表現の対象が同じ実体であっても、その属性をどの側面から捉えるかによって、表現される語形が異なってくる。つまり、認識上の違いが表現上の違いとなって顕現するのである。

#### (4) 抽象名詞と冠詞

これまでは、主に物質的な実体について述べたが、非物質的な実体についても、以上のことがあてはまる。表現の対象となる実体を抽象的・量的に認識した場合、個別性はないと見なされる。したがって、特有な形態を抽象した実体につけられる抽象名詞には個別性はない。つぎの例を検討してみよう。

- (24) There are other sings by which he may give them an idea of his thoughts or feelings. —C.K., Ogden
- (25) A smile is like a laugh. But a laugh makes a sound. —E.T.P. Book 2
- (26) This is a word: man. —E.T.P. Book 2
- (27) Diligence is the mother of success. —GTWT
- (28) a book of great historical value. —CDEG

- (29) By good luck I could catch the first train here. —CDEG  
 (30) He is attention itself. —WNWD  
 (31) She was a great beauty when she was young. —CDEG  
 (32) They did us many kindnesses during the trip. —C.K. Ogden  
 (33) Faithfulness is the best of all virtues. —GTWT  
 (34) He has no respect for age. —KNDEC  
 (35) The poor are incapable of educating themselves. —SPEJD

まず、(24)の idea, thoughts, feelings は、いずれも非物質的な実体であるが、ある有限の特殊なゲシュタルトとして把握されているから、個別性の標識が付くのである。(25)の smile, laugh, sound もそれらの実体に特有の個物としてのゲシュタルトとして捉えている。(26)の word も同様である。それに対して、(27)の diligence, (28)の value, (29)の luck, (30)の attention などは、一般的・抽象的な連続性をもったものとして捉えられているので、無形冠詞のゼロ・フォーム (— $\phi$ ) が冠せられるのである。

他方、(31)の beauty に不定冠詞が付いているのは、連続体としての「美」の側面ではなく、一個の人間として、特殊・具体的な個別性をもったゲシュタルトとして捉えられている。(32)の kindness に複数形語尾 -s が付いているのも、有限の特有なゲシュタルトとして捉え、その行為を数えあげて数詞 many を付けているのである。(33)の virtues も同様に、非物質的な実体を、特殊・具体的な不連続体として捉えた個物語である。(34)の age と(35)の poor は、本来は抽象名詞であったものが、一般的で無定形な連続体の側面をはなれて、特殊、具体的な個物の集合体 (aged people, poor people) として捉えられ、衆多名詞 (Noun of Multitude) に転化した例である。衆多名詞は、対象の全体を最初は連続的な集合体のゲシュタルトとして捉えるが、同時にその集合体の個々の構成メンバーも認識しているから、(35)のように複数動詞で受ける。つぎの例も見てみよう。

- (31) Are there fish in the moat?  
 (32) This class are all diligent.  
 (33) The jury were divided in their opinions. —CDEG

つまり(31)では fish, (32)では class, (33)では jury がこれに該当する。この場合の語形は、ゼロ・フォームであるが、連続性と個別性の両面で捉えて



いるから、プラス、マイナスのゼロ(±φ)である。このような認識に慣れない日本人には、確かに理解し難しことであるが、握りこぶしを開いてゆくプロセスをイメージすればわかりやすい。

#### 引用文献

- Great Treasury of Western Thought. New York & London: R.R. Bowker Company. 1977.
- COLLINS Cobuild English Language Dictionary. Tokyo: Shubun International. 1987.
- A Comprehensive Dictionary of English Grammar. Tokyo: Kaitakusha. 1966.
- A Dictionary of English Synonyms. Tokyo: Kaitakusha. 1956.
- Kenkyusha's New Dictionary of English Collocations. Tokyo: Kenkyusha. 1958.
- The Oxford English Dictionary. London: Oxford University Press. 1933.
- Shogakkan Progressive English - Japanese Dictionary. Tokyo: Shogakkan. 1980.
- Webster New World Dictionary. Cleveland, Ohio: William Collins Publishers, Inc. 1980.
- Christophersen, P. (1939). The Articles: A Study of Their Theory and Use in English. Copenhagen: Munksgard.
- Ogden, C.K. (1933). Basic by Examples. Tokyo: The Hokuseido Press. 1985.
- Ogden, C.K. (1935). Basic Step By Step. Tokyo: The Hokuseido Press. 1985.
- Richards, I.A., & C.M., Gibson (1975). English Through Pictures Book 2. Tokyo: Yohan Publications, Inc.
- Thomson, A.J., & Martinet, A.V. (1969). A Practical English Grammar, second edition. London: Oxford Univ. Press.
- Thorndike, E.L. (1931). A Teacher's Word Book of the Twenty Thousand Words: Found Most Frequently and Widely in General Reading for Children and Young People. New York: Teachers College, Columbia University.

#### 参考文献

- 黒田 亘 (1975)「経験と言語」東京大学出版会
- R.A. クロース (著) (1992) 田村・内藤 (共訳)「現代実証英文法」東京：ニューカレント・インターナショナル
- 田島節夫 (編) (1977)「講座現代の哲学 3：言語の内と外」東京：弘文堂
- 哲学会 (編) (1979)「認識論の諸相」東京：有斐閣

- 哲学会（編）（1980）「個体の問題」東京：有斐閣  
前島儀一郎（1987）「英仏比較文法」東京：大学書林  
三浦つとむ（1967）「認識と言語の理論」東京：勁草書房  
Mizuno, M. (1990) The essence of zero and nil. Kanagawa University  
Studies in Language. Yokohama: Center for Foreign Language  
Studies Kanagawa University. No. 13. 83-88.

---

\* 本稿は神奈川大学言語研究センターの共同研究「冠詞の研究」の研究報告として  
上梓したものです。当センターの御援助を重ねて感謝致します。